

知恵の交流を通じた人づくりの場として

ー長野県塩尻市立図書館の新たな取り組みー

内 野 安 彦
(塩尻市立図書館)

1. はじめに

塩尻市市民交流センター（愛称：えんぱーく）は、2010年7月29日に開館した。この施設は、JR塩尻駅から700mほどの中心市街地に立地している。地上5階、地下1階の複合施設で、施設全体の延べ床面積は約12,000㎡、うち図書館は約3,300㎡で、地下に閉架書庫（20万冊収容）があり、1階・2階が開架書架で、現在、約20万冊（一般書16万冊、児童書4万冊）を配架している。人口68,000人のまちとしては、相当大きな図書館であり、県内でも長野市、松本市の中心館に次ぐ規模である。施設には図書館のほかに、塩尻市子育て支援センター、交流エリア（会議室・ホール・ICTルーム・音楽練習室など）、商工会議所、民間オフィス等がある。「知恵の交流を通じた人づくりの場」をコンセプトに、図書館、子育て支援・青少年交流、シニア活動支援、ビジネス支援、市民活動支援の5つの機能が融合して、新たな価値を創造していくことで、協働のまちづくりの進化、知恵を持つ人の集積、中心市街地のにぎわいの創造を目指している。

また、図書館は、来館者が短時間で本を借りて帰るといったところといった従来のイメージを払拭し、調査研究、資料閲覧だけでなく、憩い集う場所

として滞在型の環境を整備し、様々な課題に解決のヒントや方策をハイブリッドに提供できる「役に立つ図書館」づくりに努めている。

本稿は、私が関わりを持つようになった2007年4月以降、2011年7月の開館一周年までの図書館における生涯教育の取り組みをまとめたものである。

2. 職員の意識改革

塩尻市からの招聘に応じ、2007年3月31日付けで、28年間奉職した茨城県鹿嶋市役所を退職した私は、翌日の4月1日に長野県塩尻市に採用され、図書館長を拝命した。図書館は本館以外に8つの分館を持ち、図書館長が全ての分館長を兼務し、かつ、図書館が入る塩尻市市民交流センター開設準備室の室長補佐も兼務することとなった。

私が着任した当時の塩尻の図書館の蔵書の特徴は、児童書の充実振りに比べて文学以外の一般書がやや不十分であること、さらに一般書のベストセラー本や文学賞受賞作の複本が多いことであった。

複本問題に関しては、取次、書店、作家を巻き込んだ公共図書館批判⁽¹⁾にも真摯に耳を傾ける必要があり、職員には早速、選書方法の見直しを指示した。特に分館では特定の利用者の顔が見えることから、利用を見込んだ選書に偏る傾向があり、選書について、従来の考え方の見直しを求めた。あくまで市立図書館はパブリックサービスであり、それは公平な税の還元を意図したものでなければならず、一人でも多くの市民が図書館サービスの享受者となるよう努めること、要は利用者を増やすことが必要であることを職員会議等で語ることで、間近に控える課題解決型図書館の新館運営がスムーズにいくよう職員の意識の改革に努めた。

また、資料の利用率、回転率を分類ごとに示し、配架の基本を意識してもらうよう努めた。特に分館において、書架の鮮度が低下していることを、利用率を分析し客観的に示した。こうした意識改革を促すことで、分館の蔵書の大胆なリニューアルも行った。大半の分館は市の公共施設内に設置されており、なかには2階に設けられている分館もある。書架の鮮度を上げると共に、表紙見せ配架を多用し、視覚的な効果を生かすよう分館職員に促した。

このような分館職員の努力により、分館の活性化が図られ、貸出冊数も増加に転じた。

また、利用頻度の高い雑誌は、本館と分館で多数複本購入しており、雑誌購入費の割に全館での収集タイトル数が少ないという状況があった。図書館における個々の雑誌の利用頻度は、雑誌の販売部数に正比例しているので、貸出回数を優先すれば、選書は極めて容易である。しかし、パブリックサービスの観点からは一考の余地があるとし、雑誌についても極力、複本の抑制に努めた。

「私たちは貸出冊数だけを伸ばすのではなく、利用者を増やすことを念頭においてサービスに努めること。利用者を増やそうとすれば、選書のジャンルも幅広くなり、利用者が増えれば、自ずと貸出冊数も増えることになる。」と、機会あるごとに職員に意識改革を促すとともに、時間をかけて職員との共通理解の形成に努めた。

3. 塩尻市立図書館基本計画

本市教育委員会は2006年4月に『塩尻市立図書館基本計画⁽²⁾』を策定した。本計画は、図書館協議会会長、市立小学校長、社会教育委員長等、12人で組織された塩尻市立図書館基本計画策定懇話会が約1年かけて策定したもので、アドバイザーとして、筑波大学図書館情報学系教授（当時）の葉袋秀樹が関わっている。私が招聘を受けた時点で本計画は公表されており、市民に約束したものとして、本計画の履行が私に課せられた最大の責務であった。

本計画は、2005年に策定された第四次塩尻市総合計画の中に書かれた「図書館計画の策定と新しい図書館の整備」を具体化したもので、地方都市のレベルでは斬新かつ壮大な内容が盛り込まれていた。当時の塩尻市立図書館は、教養重視型の蔵書構成であり、既に県内の大半の市立図書館が資料に加えていた映像資料（ビデオテープ）も収集の対象外で、郷土資料の収集・保存も十分と言える状況になかった。

このような状況を憂慮し、本計画は、7万人都市に相応しい施設・資料を整備すること、将来は「課題解決型図書館」とすべく、レファレンスサービ

スを充実させ、それに伴い「新聞・雑誌」を増やすこと、分館、学校、広域のネットワークを構築すること、館長の公募を含め、職員体制の充実を図ることなどを柱に策定された。本計画は、市立図書館の在り方ワーキンググループが2004年に提言した「図書館の願いと存在意義」を基本としており、提言書⁽³⁾から「図書館へのねがい」として抜粋を第1章に掲載している。

4. 長野県の生涯学習振興における図書館施策

長野県生涯学習審議会は、2008年7月に長野県教育委員会より「新しい時代にふさわしい長野県の生涯学習振興のあり方について」の諮問を受け、2009年10月に「学びの絆で地域力を高める生涯学習の推進」を基本目標とした審議結果を取りまとめて答申した⁽⁴⁾。

この中の、第5章「地域コミュニティの再生」で、要約すると、図書館の役割が次のように述べられている。

- 1 ボランティアを希望する住民の積極的受け入れ
- 2 地域の学びと学習の拠点として、課題解決に必要な資料や情報の提供と、読書ボランティアグループの地域活動支援
- 3 子どもにも大人にも必要な知識や適切な情報が入手できる環境の整備
- 4 利用しやすい運営方法の改善に努め、情報提供や講座の開催、図書館機能をアピールする
- 5 ボランティア活動が効果的に行えるように、学校や関係機関、住民団体、NPO等と連携・協力を行う

また、第7章「学びや活動を推進する関係機関・団体等の役割」の社会教育施設として、公民館、青少年教育施設と共に図書館が挙げられ、要約すると次のように使命が書かれている。

- 1 生活や仕事に必要な資料、生活や地域の課題に関する資料や情報が適切に入手できる環境を整備する
- 2 おはなし会や読み聞かせなどを行うボランティアが活動する場づくりに努め、家庭や地域の読書活動を支援する

3 住民が積極的に図書館を活用できるように、運営方法の改善に努め、図書 書の紹介や講座・イベント情報、読書の魅力を地域に発信する

このように、5章と7章に書かれた内容は重複しているものもあるが、これらは全て、2006年3月に、これからの図書館の在り方検討協力者会議が報告した『これからの図書館像⁽⁵⁾』に書かれているもので、答申にあたって、この報告がかなり理解されたものと推測される。

5. 新図書館での新たな取り組み

2010年7月29日にオープンした新図書館は、その規模はもとより、性格も大きく変わった。

図書館運営の基本となるのは、言うまでもなく市民との公約である「塩尻市立図書館基本計画」であり、目指すべきことは「これからの図書館像」の具現化である。

また、「塩尻市市民交流センター運営管理方針」⁽⁶⁾の図書館関連計画においては、蔵書、配架、サービス計画等を示し、長野県内にはかつてない新しいタイプの図書館像を示した。

ちなみに蔵書計画は、近隣図書館との資料の差別化を図ることで、広域的な図書館として利用者の利便性を高め、ワイン、短歌等の地域資料は塩尻ブランドとして積極的に発信し、400誌の雑誌はMARC導入により、レファレンスツールとしても有効に活用することを示した。

隣接する松本市の図書館とは性格を異にした図書館をつくることで、利用者は、目的に応じ二つの図書館を使い分け、多様な資料が入手できる図書館エリアにすることを意図した。また、市外からみえる利用者には、中心市街地への経済的な貢献も期待した。

休館日も、松本市の本館が月曜日なので、塩尻の本館は水曜日に設定した。広域で捉えれば、図書館サービスが常に受けられるエリアとした。

新館において新たに取組んだサービスを次に紹介する。ほとんどが県内の図書館で前例がないか、あっても数館の実践しかないもので、全国的に見

でも極めて実践例の少ないものもあり、塩尻市立図書館のオリジナリティを理解していただけるものと思う。

① 「しごと情報コーナー」の設置

商用データベース（6つのコンテンツ）、インターネット端末、各種統計・年鑑・白書等の配架。独自のカテゴリー（企業、経営者、雇用、起業、転職等の12に種別）を表示した、仕事関係の単行本の配架。専用カウンターを設置し、レファレンスサービスの定着を図る。

② 郷土資料の書誌整備

郷土関係のレファレンスに的確に応えられるよう『信濃教育』、『信濃』、『文化財信濃』、『長野県立歴史館研究紀要』、『松本大学研究紀要』『Kura』等の記事（論文）・著作者の内容細目を独自に整備する。

③ 雑誌を使ったレファレンスの実践

本館に約400誌の雑誌を配架。民間の雑誌 MARC を導入することで、雑誌を使ったレファレンスが容易になった。

④ 「闘病記」「緩和ケア」等のコーナーの設置

NDC に準拠した配架では、関連資料が別れてしまいがちな闘病記や緩和ケア等について、利用者が「ワンストップ」で資料が入手できるよう4類の棚に専用コーナーを設けた。

⑤ 学校及び学校図書館との連携

施設が大きくなったことにより、1回100人余の生徒の調べ学習の受け入れが容易になり、高校生の受入が急増した。また、要請があれば、学校のICTルームにて図書館講座も積極的に行う。

⑥ 図書館の児童コーナーと子育て支援センターを併設

全国でも先例がないと思われる児童コーナーと子育て支援センターを併設した。相乗効果で互いの施設利用者は増加し、子育て支援センター利用者に向けたテーマブックス等、様々なコラボレーション事業の展開も容易になった⁽⁷⁾。

⑦ 多様な郷土・地域資料の収集

県内の文芸同人誌や大学研究紀要等を貴重な郷土・地域資料として可能な限り収集。入館制限の厳しい大学図書館でしか閲覧できない研究紀要を市民に開放した。この方針が一部の郷土史家に理解され、個人所有の貴重

な郷土資料の寄贈が増加した。

⑧ 外国語資料の充実

約1,400冊配架（児童書は25%）。『ドラゴンボール』『ワンピース』『スラムダンク』等の日本のコミックの英語版も多数収集。地方ではあまり目にする機会のない書籍を置くことの図書館のショールーム効果と、平易な英語表現であることから、中・高校生の英語への関心を深め、外国人利用者が飛躍的に拡大した。

⑨ ティーンズコーナーの設置

ティーンズコーナー名を公募し、「若葉のコーナー」と決定。図書は約4,500冊、雑誌は10誌配架。また、ティーンズ専門広報紙「Wa・Ka・Ba」を創刊。コーナーを中高生と図書館、中高生等間のコミュニケーションの場とすべく、様々な仕掛けを行っている。

⑩ 塩尻ブランドの発信

塩尻を代表するブランドのワインについて、図書館としても重要な地域資料とすべく、網羅的に資料を収集。メインカウンター近くの最高のロケーションに書架を設け、蔵書としては県内トップクラスとなった。そのほか、短歌の里としても、短歌の資料収集にも努めている。

⑪ NDC や資料種別に拘泥しないオリジナル配架

視聴覚資料（CD、DVD）を別置とせず、本と混配することにより、利用者の資料へのアクセスを容易にした。他にも、小説とエッセイと作家研究を混配するなど、書店と図書館のハイブリッド型の配架とした。また、辞典・事典類の参考図書は別置せず、同分類の書架に配架し、利用者の館内移動の軽減に努めた。

⑫ オリジナルの図書館システムを構築

オープンソースのプログラミング言語 Ruby を使った図書館システムを日本で初めて採用した。インターネットで稼働するシステムの利点を生かして、蔵書検索の結果一覧に、全国書店ネットワーク「e-hon」をリンクさせ、図書館の書誌情報以外の視覚的な情報の提供に努めると共に、地元の書店振興をも意図した。

⑬ IC タグの貼附と BDS 管理

本館・分館全ての資料に IC タグを貼附し、BDS（Book Defection System）

を設置することで、入館者数管理、資料の盗難防止等を図る。また、セルフ貸出機を導入し、カウンターにおける貸出業務の軽減と利用者のプライバシーの保護にも努める。

⑭ 職員のユニフォームを一新

新館オープンにあたり、従来のエプロンを身に付けたスタイルを踏襲するか否かを検討した。結論的には、上が白のブラウス、下が黒のスカートまたはパンツとし、ブラウスの上に羽織るのはグレーのカーディガンと決まった（夏期の週末を除く）。全て自費購入とし、黒のカフェエプロンを貸与し、図書館スタッフであることが識別できるようにするとともに、図書館職員のイメージを一新した。

上記の内容は、新館開館と同時に、または新館開館に向けて準備を進めてきた新規の取り組みだけを述べたもので、従前より取り組んでいるボランティアの積極的な受け入れや、広報活動、各種機関との連携等の様々な取り組みも拡大・充実に努めてきている。

図書館に一步足を踏み入れると感ずる、明るさ、若干の喧噪、自由な空間に、きっと今までにない「新しい図書館のイメージ」を感じていただけるのが塩尻市の図書館である。ただし、新しいと言っても、奇を衒ったものではなく、スタッフと一丸となって、基本に忠実に創りあげたつもりである。

6. おわりに

今般、塩尻市から館長というオファーを受けて、新しい図書館をオープンさせるという貴重な経験を得た。塩尻市立図書館基本計画の具現化は当然のことながら、私がアメリカの公共図書館で見たような、職員は明るく、レファレンス資料や雑誌が潤沢にあり、老若男女が様々な目的で集う図書館をイメージした。吹き抜けのある開放的な施設と相まって、想定したイメージはかなり現実のものとなった。

職員は利用者への挨拶を励行し、ホスピタリティを尽くしたサービスを図書館のミッションとしている。

新館が開館して一年が経った。2010年7月29日から2011年7月28日までの丸一年を見てみると、当初、年間約20万人と予測された図書館来館者は約482,000人と、予測を大きく上回り、貸出冊数は平成21年度⁽⁸⁾と比較し約2倍となった。

最も大きな変化は、本館における新規登録者数で、その数は6,662人を数え、変則的な比較であるが、21年度と比較すると7.8倍と急伸した。その要因は、市外在住者の登録の増加である。

残された課題はまだ多い。「地域コミュニティの再生」のために、今後とも積極的に図書館の役割を喧伝し、地域の学びと学習の拠点及び知恵の交流を通じた人づくりの場として、スタッフや市民と共に創り上げていくつもりである。

注

- (1) 特に2000年から2003年にかけて、図書館によるベストセラー本の複本購入が出版物の販売不振に繋がっているとして、図書館を無料貸本屋と揶揄する論議が、作家や出版関係者等で盛んに行われた。
- (2) 塩尻市役所「塩尻市立図書館基本計画」
<http://www.city.shiojiri.nagano.jp/ctg/360029/360029.html>, 2011年7月15日参照。
- (3) 塩尻市役所「市立図書館の在り方ワーキンググループ提言書」
<http://www.city.shiojiri.nagano.jp/kbn/200031/200031.html>, 2011年8月2日参照。
- (4) 長野県生涯学習審議会「新しい時代にふさわしい長野県の生涯学習振興のあり方について（答申）」
<http://www.pref.nagano.jp/kyouiku/syougai/singikai/syougai/shingikaitop.htm>, 2011年8月2日参照。
- (5) これからの図書館の在り方検討協力者会議『これからの図書館像～地域を支える情報拠点を目指して（報告）～』2006年、94頁
- (6) 塩尻市役所「運営管理方針」
<http://www.city.shiojiri.nagano.jp/ctg/310124/310124.html>, 2011年7月15日参照。
- (7) 内野安彦「図書館と子育て支援センターの連携による家庭教育支援の取り組み」（『社会教育』779, 2011年）73-75頁
- (8) 平成21年度は、新館移転準備のため2月に閉館したので、例年より若干開館日数が少ない。